

江戸川乱歩『芋虫』論

ニライ・チャルシムシエク

“The sight of hundreds of men on crutches going about in groups, many having lost one leg, many others both legs, caused sickness and horror. The maiming of masses of strong, young men thus brought home was appalling.”^(註1)

— はじめに —

近代国民国家を「制度の集合体」と名づけたゲルナー^(註2)は、その秩序を維持するための「社会的な分業」が権力と利益の明確な分配を必要としたと指摘している。この「制度の集合体」の代表者として、男性は公的領域の唯一の権利者とされ、女性はそれに従属している被支配者として私的領域に置かれたことは周知の通りである。明治維新によって「帝国＝軍事国家」として出発した日本社会においても例外ではなく、生物学的な性の違いを基に二分化された男／女が諸制度によって方向付けられ、新しい社会秩序の結果として「男らしさ」と「女らしさ」という概念が形成された。さらにいえば、男性に「公的領域の独立、社会的なことがらの意思決定」を与え、「力で支配する」男らしさと「男性に従属する」女らしさという「強制的な人格制度化」を行ってきた国家体制は、若桑みどりによって「男性支配型国家」と名づけられている。このような「男性支配型国家」では、女性の国家に対する任務は、平時でも戦時でも変わらず、男性に従属しながら家庭を守って、子どもを産むことに固定されていたのに対して、国家の支配者^(註3)であるはずの男性の任務は、国の存在性を防衛するために“戦争＝暴力に従事する”ことも求められていた。

しかし、その一方で、阿部恒久^(註4)は、「女性からみれば、男性が造った国家、社会システム、諸規範が女性のあり方を規定している」ことは否定できないものの、結局、それは、同時に「男性のあり方をも強く規定している」と主張している。そのような「男性のあり方」についてはモッセの指摘が注目^(註5)に値する。モッセは、ヨーロッパを中心に、「男性のあり方」がいかにかに創造され、規定されてきたかを分析した上で、それは近代以前から既に存在していた「各構成要素」が近代になって、外面・内面

共に「一つの調和的な全体」として組織化され、名誉やそれを守るための勇気などがその内面的な資質とされたと述べている。

また、近代にこのような内面的な特性が「男らしさの本質的指標」として定められたと主張しているトーマス・キューネは、^(註6)「男らしさの様式や理想、男らしさのイメージ、男であることの定義」などは「歴史的生成物」であり、変化すると述べている。キューネは、これを以て、これまで女性の視点から研究されてきた性の歴史であるが、男性の性／身体もまた歴史を持つ社会的・文化的、つまり制度的なものであるが故に、構築された女性性だけではなく構築された男性性の歴史をも解明した上で、女性史と男性史を合わせて研究すべきことの重要性を指摘している。

結局、「男らしさの証明」として示されたこれらの内面的要素を備えることが要求されている男性たちが、平時においては国家の支配者となるのに対して、戦時の場合は、国の存在を防衛するために、「国のため」、また「銃後の守り」と美化された観念の名のもとに“戦争＝暴力”に従事することを余儀なくされてきたことは、いうまでもない。近代国民国家は軍事的であるからこそ、男性に求められた男らしさは、まず〈兵士〉としての男らしさであった。故に、彼らはこのような誇り高き任務を果たそうとして、戦死／戦傷する危険に違和感を覚えず、戦争し続けてきた。国民国家体制において、このように国を守るために戦うべき兵士として定められた男性たちにとって、戦場は、彼らが命を落として名誉なる戦死を遂げる場となり、さらに、それにとどまらず、多数の男性が戦傷によって心身に障害を負い、その苦難を背負って生きる運命を抱えてしまう場ともなった。

「国のため」に戦線に送られた男性たちは、いったい戦地でいかなる生／死を体験してきたのか、また、それは彼らの心身にいかなる跡を残してしまったのであろうか。本稿では、近代における男性性の再構築において、兵士の肉体と精神に生じた戦争の傷痕の問題を中心に据え、戦争が如何なる役割を果たしたのか、戦争において男性の本来の特質とみなされてきた暴力性・支配性が如何に正当化され、その戦争体験が兵士としての男性の性とセクシュアリティに如何なる影響をもたらしたかを検討する。非常なる戦傷を負って、四肢と聴覚と声とを失った兵士を描いた江戸川乱歩の作品『芋虫』を取り上げて、戦傷が戦争の記憶となり、いつまでもその身体に残されてしまった主人公の男性の物語を分析し、戦争を通じて国家体制によっ

てモノにされ、消費された「男性のあり方」を明らかにすることを目標とする。

——『芋虫』は反戦小説である——

探偵小説作家である江戸川乱歩の書いた他の作品とは性格の大きく異なる「芋虫」は、作家自身に「私としては力作に属するものであった」^(註7)と評されていた作品である。1929年に『新青年』に「悪夢」^(註8)の題で発表され、後に『江戸川乱歩全集』に「芋虫」^(註9)として載せられたこの作品は、元陸軍中尉である廃兵「須永」とその妻「時子」の物語を描いている。まず、作品のあらすじをみってみる。

「国のため」に戦争に従事した須永中尉は、運良く帰還できたとはいえ、大変な戦傷を受けて、手足が切断され、視覚と触覚以外のその五官を失ってしまう。その勇敢さの代償として金鵄勲章が授けられ、世間に名誉をたたえられたものの、勝利の熱が冷めて、社会が戦後の困難を背負ったまま生きていくうちに、須永に対する関心と同情は薄くなっていく。その後、須永の上長官であった鷲尾少将の好意に甘え、その田舎の邸内にある離れ家に移って、社会と切断された空間に閉じこもった須永夫婦の悲惨な暮らしにおいて、性的関係のみが唯一の関係となる。それは、当然、須永の身体から推察できるように通常の夫婦関係ではなく、彼のわずかに残った身体が妻によって、いわば操り人形のように自由に操られるというものだった。その三年後のある晩、突然、夜中に眼を覚ました妻は、隣でじっと天井を見つめている夫のその目付きに対していらだちを抱えて、結局、彼の世界への唯一の〈窓〉であった両目をつぶしてしまう。その後、妻は鷲尾老少将の家に行って、罪を語り、二人で彼らの住まいに戻る。しかし、須永が家にいないので、探しに出かけた二人が、彼が邸内にある古い井戸に身を捨ててしまったことを悟ったところで物語が幕を閉じる。

このような極端な身体的欠損者となった兵士を描いている「芋虫」は、前述したように、最初に「悪夢」のタイトルで発表された作品である。その理由について乱歩は『探偵小説四十年』において、『改造』に依頼されて書いたにもかかわらず、「反軍国主義の上に、金鵄勲章を軽蔑するような文章があった」ために、伏せ字にしても、「当時左翼的な評論などで政府から特別に睨まれていた」改造社では載せられな

いので、「思想的に睨まれるという心配」のない「娯楽雑誌」、『新青年』に発表されることになったと説明している。「芋虫」は、当時左翼派に「反戦的」だと高く評価されたものの、乱歩は、「左翼イデオロギーで書いたわけではない」と主張し、それより「極端な苦痛と快楽と悲劇とを描こうとした」からこそ、そのような悲劇を生み出した戦争を「好都合の材料」として採用したと反論している。

その一方で、「芋虫」は、作者によって否定されたにもかかわらず、後に、プロレタリア文学だと評されたこともある。たとえば、荒俣宏は、それが「プロレタリア文学に好意的な雑誌」である『改造』の依頼で書かれたことに注目し、「やむを得ぬ事情のために奇怪小説として発表した」（傍点原文）乱歩が「プロレタリア文学だと宣言さえしていたら、間違いなくその分野の傑作として『セメント樽の中の手紙』と肩を並べて歴史に残ったろう」と主張している。それに対して、中島河太郎^(註11)によれば、「芋虫」は、昭和四年頃の「プロレタリア文学とナンセンス小説に文壇が占領され、旧探偵小説時代は過ぎ去った」状況の中で書かれたものの、「発表機関さえ異なれば、一般文学作品として遇されなければならぬ」作品であったと評している。他方では、「芋虫」を「グロテスク」な作品、また、主人公を「グロテスクな人間」だと評している論もある。さらに、「芋虫」を「監視された精神」という視点から捉えて論じ、乱歩の作品における主人公たちを「いずれも社会からは隔離されて、閉ざされた夢に生きる奇形の魂の持ち主たち」だと述べている浜口稔は、これを以て、本作品をその「典型」として「密室に監禁された精神が、いかに醜怪な妄想の虜となるか、この作品ほど執拗に描ききった作品は多くない」と高く評価している。また、従来の「芋虫」論とは異なって、作品の意義や主人公の須永中尉ではなく、妻の時に注目したものとして、百瀬久^(註12)の論がある。百瀬は、「様々な読みを可能にしている」この作品が発表された当時の「悪夢」の題を妻の身体と関連させて検討している。

しかし、ここで、特に注目したいのは、松山巖^(註13)による議論である。乱歩の作品を通じて1920年代日本の都市文化を論じた松山は、「芋虫」を「乱歩が述べたように『なぜ神は人間を作ったか』という疑問と『モノのあわれ』をキーワードにして」分析している。その結果として、「労働力として役に立たない老人や病人が『治療』と

称して消えていく先にあるのは死のみ」であった都市文化において、「芋虫」は、主人公の肩書きを外すと「業務上災害を起こし、『治療』と称して消された労働者とその妻の話」、あるいは「いつかやって来るはずの」死を覚悟した病人とその看病者の話として読めると指摘している。本稿においては、この元陸軍中尉の廃兵「須永」の物語を「労働者とその妻の話」として読めるという指摘に注目したい。主人公の不具性を通じて、兵士と労働者とを等しく見るという視点は、示唆に富んでいると思われる。

—— 兵士の身体は男らしさの証 ——

「芋虫」の主人公として登場する極端な身体的欠損者の兵士の物語を分析する前に、帰還兵が抱えた戦傷の問題を論じたものを紹介しておく。まず、ジュニファー・トラヴィス^(註17)がアメリカ南北戦争を題材とした文学作品において分析した兵士たちの感情的傷跡を見てみる。その著書の中で、トラヴィスは、アメリカ南北戦争の文脈において、国家的な男らしさのレトリックを取り戻し、また作り直す手段として兵士の情緒的傷害をテーマとしたヘンリー・ジェイムズやウィリアム・D・ハウエルズなどの作品を分析し、軍人らしい男らしさと並んで、戦時文学の土台となった兵士たちの情緒的傷害＝精神的なトラウマについて論じている。トラヴィスは、特に、戦争体験によって精神的トラウマを抱えた帰還兵の戦後の男女関係における悲劇に焦点を当てている。また、エコフェミニズムの代表的な作家スザン・グリフィン^(註18)のヘンリー・ジェイムズの戦争体験に関する、戦傷を「まさしく男らしさの言葉 (language of manhood) であった」と述べたその表現を引用しながら、身体的な傷害にも触れている。さらに、「戦時において国家の勇敢さの唯一のしるし」となった兵士の身体的な傷がフォトジャーナリズムによって「勝利者の名誉のしるし、敗北者の敗北の明らかなしるし」として記録されたことを指摘している。

トラヴィスが情緒的傷害、また精神的なトラウマを論じているのに対して、ジョアンナ・ブルク^(註19)は、兵士のディスアビリティを軸に据える。ブルクは、「最前線における男性たちの欠損の恐ろしさは、イギリスの民間人の想像を超えるほどであった」と説明した第一次大戦とその後のイギリスにおける兵士のディスアビリティ

ティを中心に、仮病や男性同士の団体精神、男性の理想的な身体などまで考察している。社会的レトリックにおいて、「勇気の象徴」であり、「輝かしい奉公の顕著な目印」であった兵士の欠損した身体は、戦時期に、彼の「愛国心の証拠」となって、「肢の存在より欠損の方が強力」で、社会的に有利な地位を獲得する役割を果たしたものの、手足の切断された男性たちが帰還した郷土において欠損の価値は急速に忘れられてしまった。ブルクは、このような兵士たちが置かれた状況の悲惨さを「数年以内に、彼らの戦士としての地位が忘れられてしまい、社会は彼らを障害のある子どもまたは怪我した労働者の低い地位に分類した」と説明している。要するに、戦時中には特異なディスアビリティであった肢のない状態は、戦後になって正常化され、正常なディスアビリティへと反転してしまったと指摘されている。ここで注意すべきは、前述した松山巖の主人公を「業務上災害」を起こした「労働者」に例えた議論と対照的に、戦時中、身体欠損が「愛国心の証拠」として兵士にもたらしたその高い地位が、戦後に「怪我した労働者の低い地位」に変化したというその落差に着目しているという点である。つまり、松山の「芋虫」論においては、主人公は、こうした社会的に高い地位を持っていた「元兵士」であることの意味が消去されてしまっているのではないかと思われる。

ここまでは、アメリカの南北戦争とイギリスの第一次大戦における、兵士たち＝男性たちのディスアビリティの有様を大まかにみてきた。それに対して、時期は異なっているといえども、日清・日露戦争を経て世界大国に加わった日本の男性たちも、このように、戦争による精神的・身体的ディスアビリティが生み出した悲劇を体験したに違いないと考えられる。海野福寿^(註20)は、「二〇世紀最初の大戦」であった日露戦争は物質的にも精神的にも「日露双方に甚大な被害」をもたらした、日清戦争の比にならないものであったと指摘している。父であり、夫であり、また息子であった兵士たちの戦死による悲しみとその遺族の戦後の生活における困難はいうまでもない。しかし、戦線から生きて帰ってきた男性たちの中には数多くの「戦傷病のあとを引きずった帰還兵」も含まれており、彼らにとっての戦後は、いわば第二の戦争であったと言っても過言ではないだろう。海野は、これらの「廃兵の烙印を押された」兵士たちが陥った状況を「彼らに勝利の栄光もなく、生きる目的を失って心までも傷ついた」と説明している。「廃病院法」によって開設された廃兵病院には少

数の者しか収容されず、「多くの廃兵は、地域・血縁共同体の扶助や慈悲の杖にすがって細ぼそと暮らすほかなかった」。このように述べている海野福寿は、廃兵の悲惨な物語を語った例として市井の小学校教師真下飛泉作詞の叙事唱歌シリーズ第九編の「慰問^(註21)」を挙げている。

ここにあはれは廃兵の／或は腕をもぎとられ／或は足を射ぬかれて
生れもつかぬ不具となり／屈強至極な身をもって／働きざかりの身をもって
茶碗と箸がもてぬのを／思はば涙がこぼれます／杖にすがって片脚で
半町行っては一休み／溜息ついておみでのを／見ては涙がこぼれます

——「極端な苦痛」と〈悪夢〉——

戦争は、「国のため」と正当化された暴力の場として、戦線で戦う兵士たちにせよ、銃後の者たちにせよ——国民とされた人間が体験するもっとも「極端な苦痛」と「悲劇」の場であろう。しかし、戦争による被害を受ける者は、必ずしも兵士として戦争に従事する男性のみではないものの、その多くが兵士であることは、否定できない。『芋虫』は、このような大変な戦傷を負ったにもかかわらず、〈生命を取りとめること〉ができた戦争障害者として故郷に送還された須永中尉と妻時子のそれから三年後のある一晚で幕を開く。それは、須永を〈まるで手足のもげた人形〉に変えた戦争によって、夫婦の一変してしまった生活において、通常でありながら通常ではない一晚である。その悲劇が須永夫婦を襲ったのは、三年も前のことではあるが、『芋虫』では、その三年も続いた通常〔ではない〕生活の苦悶が、クライマックスを迎えた“悲劇の終幕”が描かれている。

須永中尉は、〈悪夢の中のお化けみたいに手のあるべき所に手が、足のあるべき所に足が、まったく見えないで、包帯のために丸くなった胴体ばかり〉として、妻の元に送られる。衛戍病院の医員に〈両手両足を失った負傷者〉は稀ではないが、〈みな生命を取りとめることはできなかった〉にもかかわらず、須永は〈実例〉のない〈奇蹟〉であると報告される。まず、その〈生命を取りとめる〉ことができた須永中尉の〈お化け〉に変貌してしまったその外見の描写を読んでみよう。

砲弾の破片のために、顔全体が見る影もなくそこなわれていた。左の耳たぶはまるでとれてしまって、小さな黒い穴が、わずかにその痕跡を残しているにすぎず、同じく左の口辺から頬の上を斜めに眼の下のところまで、縫い合わせたような大きなひつりができている。右のこめかみから頭部にかけて、醜い傷痕が這い上がっている。喉のところグイと抉ったように窪んで、鼻も口も元の形をとどめてはいない。そのまるでお化けみtainな顔面のうちで、わずかに完全なのは、周囲の醜さに引きかえて、こればかりは無心の子供のそれのように、涼しくつぶらな両眼であった

通常の間人が持つその身体が〈両手両足は、ほとんど根もとから切断され、わずかにふくれ上がった肉塊となって〉しまった須永の悲劇は、このような外見の持ち主になってしまったことにとどまらず、彼は、さらに、聴覚と声も失っているわけである。作品において、須永の状況は、ちょうど作家が述べた通り「極端な苦痛」と「悲劇」を反映しており、想像するだけでも恐ろしく感じるように描かれている。一方、須永のように戦傷で極端な被害を受け、身体欠損をした例は、その衛戍病院の医員に告げられたように、稀ではない。たとえば、社会主義紙『光』^(注22)には、日露戦争をめぐる「戦地より帰り来れる傷病兵士は実に惨鼻に値するものあり」と様々なニュースが載せられていた。明治38年12月20日に『光』に掲載された「悲惨なる廢兵」に関するニュースは、次の通りである。

「戸山病院に収容せられたる者にして上顎が無くなりて口内より鼻の穴の見える者あり、頭部に貫通銃創を受けて両眼明を失したる者あり」

「腎部の貫通銃創を受け腹部に抜け腰の立たざるものあり、睪丸を射貫れて両丸共に失ひ活きながら生殖器能を有せざるものあり」

「四肢を切断せられて切れ残の腕に筆を挟みて手紙を書く者あり、四肢悉く切断せられたる者は甚だ多く、豊橋の予備病院にて、其の夫の両手両足を切断せられたるも知らず、面会に来りたる其の妻は、一見見るよりキャッと叫んで気絶したり、山口県にても四肢悉く失ひて樽づめにて戦地より転送され、その不具の状態を嫁に嫌はれて養家を追はれたる者ありと」

前述したように、百瀬久は、須永の妻時子の「行動から」〈悪夢〉を考察し、その観点から読むと、発表されたその当時のタイトル「悪夢」がこの作品にふさわしいと主張している。しかし、〈悪夢〉とは、須永中尉を〈悪夢の中のお化け〉にした、「国家のため」に従事した“戦争”であり、須永の“欠損した身体”そのものであり、また〈哀れな不具者とその貞節な妻〉が抱えた〈世間から切り離れた〉“悲惨なる生活”であったと思われる。戦争が悪夢であることは、自明なことではあるが、この作品はそれをもう一步進めており、この〈お化け〉のような身体が創った〈悪夢〉が戦後にも続いていく、ということを巧みに描いている。すなわち、彼は〈かつては忠勇なる国家の干城^(註20)〉であり、またその身体が〈肉塊〉に変わるほど傷ついたが故に〈陸軍の誇り〉であった。さらに、その〈肉塊〉、いわば、〈生きたむくろ〉は、戦場から内地に送還された時、〈未曾有の奇談として〉新聞紙を占め、〈彼の四肢の代償〉となる〈功五級の金鷄勳章^(註21)〉も授けられたのであった。しかしながら、〈世の中は凱旋祝いで大騒ぎをやっていた〉頃、社会の戦死傷者への同情が高く、夫婦のところへ知らないものからさえ〈名誉という言葉が、雨のように降り込んで〉きた中で、須永と時子の悲劇が始まる。しばらくすると、勝利の熱が冷めて、戦争を体験した国民がその後の困難を背負ったまま生きていくうちに、戦争の記憶と同様に、それを思い出させる、自分の夫、自分の父、または自分の息子ではないこれらの心身に傷を負った廃兵たちのことも忘れられ、須永中尉の身体と夫婦の生活は〈悪夢〉に一変していく。要するに、『芋虫』における「極端な苦痛」を生み出した須永の身体が表象するのは、“戦争” = 〈悪夢〉であると言えるとすれば、〈忠勇なる国家の干城〉である兵士を〈芋虫〉にたとえるそのタイトルを、検閲のために避けたかった『新青年』の編集者が「悪夢」と変えた意図も説明できるであろう。

『芋虫』において「極端な苦痛と快楽と悲劇」を描こうとしたと断言した乱歩が意図したその「極端な苦痛」に当たるのは、まさに戦争が主人公の廃兵須永の身体にもたらした体験そのものである。つまり彼は、作家によって、手足だけではなく、聴覚と声をも奪われ、内的声でさえ話すことが許されず、まったく〈大きな黄色の芋虫〉のような身体の中に虜にされてしまってその「極端な苦痛」を体験せざるを得なくなる。次に、極端な「快楽」であるが、それは、妻をその行為主体とすることで表現された二人の性的関係であると思われる。

—— 〈貞節な妻〉の罪悪感 ——

『芋虫』における極端な「快樂」を表象している夫婦の性的関係に先立って、まず、夫が極端な身体欠損者であるが故に、正常な人間でありながら、夫と同様に正常な社会関係から切り離された人生を送るべき立場に置かれてしまった妻時子の生活を見ることにしよう。

時子は、須永に比べると世間から遠ざけられたものの、鷲尾少将とその家族からなる狭義の社会と未だに関係を持続させている。とはいえ、作品の中では、その関係が少将との会話においてしか表現されない。ここで、このような狭義の社会といえるものを代表しているのは男性である、という点が明確に表象されていることは興味深い。鷲尾少将は、彼女が母屋を訪ねる度に、少将は須永を——彼の現在の人間としての資格さえ失った存在と対照的で、グロテスクな——〈昔のいかめしい肩書き〉で呼んで、〈人間だかなんだかわからないような廃兵〉のその社会的地位を妻に思い出させる——ここでいう社会的地位とは、須永の“男性”としての地位を意味すると考えられる。やはり、彼が国家によって戦地で使い捨てのモノとして利用されたにしても、未だに男性なのである。言い換えれば、妻である時子は、女性として須永に付き従うという関係が保持されており、須永は男性であることが強調されている。鷲尾少将は、単に須永の男性としての地位だけではなく、さらに、時子が女性であることも世間の代わりに彼女に告げるべく、〈忠烈〉が〈世に知れ渡って〉いる兵士の妻として、彼女の〈貞節〉や〈自分の欲をすっかり捨ててしまって〉須永を介護してきたことを褒めて〈今の世の美談〉だと述べる。

時子は、初めの頃、ちょうど鷲尾少将の褒め言葉にふさわしく〈世間知らずで、内気者で、文字どおり貞節な妻で〉、それが褒められると〈誇らしい快感をもって〉いたものの、須永が郷土に送還されてから三年後の今現在、彼女は鷲尾少将の褒め言葉など聴くに耐えないのである。それは、二人の〈まるで暗黒地獄のようなドロドロの生活〉による彼女の罪悪感のためである。最初の頃〈痴話喧嘩の末〉に妻が夫の機嫌を治すために取った手段でしかなかった性的関係であるが、次第に〈まるで、大きな黄色の芋虫〉となった須永の胴体が妻の〈性欲をそそるもの〉となってゆき、〈勝手気ままにいじめつけてやりた〉くなってしまうことが、その罪悪感

の原因である。時子は、鷺尾に〈自分の欲をすっかり捨てて〉しまったと言われるたびに、〈身の毛もよだつ性欲の鬼〉のようにこの尊ぶべき廃兵の夫を〈その性欲を満たす〉ための〈一種の道具〉としていることを思い出してしまう。すると、事実を知るはずのない少将と顔を合わすと、まるで〈お前は貞節の美名に隠れて、世にも恐ろしい罪悪を犯しているのだ〉と責められているように感ぜずにはいられない。つまり、鷺尾の褒め言葉や、眼つきがまるで世間そのものとなって、近代社会の男女間における一般的な性的役割が一変した人生を送っている彼女に、もはや何も関係を持たず切り離された世間の束縛を感じさせ、二人の性的関係をめぐる罪悪感を与えてしまう。

結局、時子に罪を犯させる結末へと導いていく夫婦間の性的関係は、作者の描こうとした極端な「快樂」であると同時に「悲劇」でもあると思われるが、その「極端な悲劇」に移る前に、妻が罪悪感を抱いて、罪を犯す原因となるこの関係を夫須永の方から分析してみる。

—— 極端な「快樂」 ——

戦後になると、〈戦捷の興奮もしずまり、それにつれて、戦争の功労者たちへの感謝の情もうすらいで^(註25)〉ゆき、須永のことを〈もう誰も口にするもの〉は、いなくなってしまう。その上、国家による年金が夫婦の暮らしに足らず、須永の〈戦地での上長官であった鷺尾少将の好意にあまえて、その邸内の離れ座敷〉に移ることになる。そこは、夫婦の「快樂」の場となり、また「悲劇」の舞台となる。

二人が〈邸内の離れ座敷〉に移ってから、彼らの社会との関係は、須永の四肢のように切断されてしまう。実は、二人が暮らしている〈母屋と離れ座敷のあいだは、ほとんど半丁も隔たっていた〉のであり、〈二階建ての離れ家〉は、ちょうど二人の生活そのものを象徴しているように〈そこに、黒く、ぽつんと立っていた〉。つまり、須永夫婦は、世間という広義の社会からばかりではなく、鷺尾家という狭義の社会からも切断されたような暮らしを送っていることになる。時子は、鷺尾少将とその家族が住んでいる母屋に行ったりもするが、〈大島銘仙の大きな風呂敷包み〉から〈首

が突き出て) いて、〈一種異様な物体〉のように見える須永にできることは、妻とコミュニケーションをとろうとして〈米搗きばったみたいに、或いは奇妙な自動機械のように、トントン、トントンと〉畳を叩くことだけである。「男性中心型国家」の支配者であり、戦時にそのために戦ってきた兵士であったにもかかわらず、戦争が終わると、「兵士」というより、寧ろ「障害者」という認識で捉えられるようになってしまったこの男性は、〈普通の人間が手を叩いて人を呼ぶ〉ことさえできない。戦地へ誇るべき兵士として行き、結局モノとなって帰ってきた彼は、〈乳呑み児〉のように妻の介護無しに、戦傷にもかかわらず取りとめたその命を持続することができない立場に立たされている。換言すれば、戦争によって、彼の全ての男性的・人間的に^{エッセンシャル}不可欠な^{エッセンシャル}しが奪われ、また、彼が金鵄勲章を授けられたその当時の社会の同情もなくなると、須永中尉は男性性／人間性／社会性の剥奪されたモノに化してしまっている。

時が経つにつれ、彼は余りに小さな存在——社会的・身体的意味においてまさに字義通りに小さい存在——を辛くも持続するための最も基本的で物質的なニーズとして〈食物〉の他に〈時を選ばず彼女の肉体^(注26)〉を要求し、それを以て、二人は性的快楽に溺れていく。須永のこのような要求は存在持続のために基本的なニーズであるが、そのうちの性的関係とは、身体欠損にもかかわらず、彼が未だに生きている証にもなりうる、バイナリーな関係を表象するといえる。しかし、この性的快楽の意味を考える場合、興味深いのは、次の点である。鷲尾少将に未だグロテスクに〈須永中尉〉と昔の肩書きで呼ばれている主人公は、「男性支配型国家」の勇敢な兵士として、モッセに指摘されたような「調和的な全体」を表象していたものの、今の彼は、戦傷によって、そのような兵士の身体が持つべきであるすべてのシンボルを失って、単なるモノに化し、わずかに残っているその〈生命〉も妻の介護無しには続かなくなっている。このように、国家そのものを代表している兵士としてのシンボルが無くなってしまったにもかかわらず、主人公は、社会的範囲のすべての束縛から自由になった男性として、性的快楽を享受して生きようになる。さらに言えば、彼は、男性として女性を支配する／守るジェンダーであるべきなのに、戦争によって、まったく妻の手に落ちてしまった〈畸形なコマ〉のようなその身体は、女性の〈性欲をそそるもの〉となり、女性によって支配される／守られることによる快楽を

体験することになる。キューネは、「女らしさの本質的指標」は男性のそれと正反対で、弱さや行儀、優柔不断、感情の豊かさ、保護を求めることなどとして定められたと指摘しているが、そのような観点から、『芋虫』における夫婦関係を評すると、須永は国家が欲する兵士とは、真逆の存在として表象されているといえる。

——「芋虫」の死 — 悲劇の終幕 ——

時子は、須永との「極端な快樂」による罪悪感のために、鷲尾少将が留守にしたとき母屋を訪ねることで、鷲尾の眼や言葉から逃れるようにしている。一方、彼女をじっと見つめる“眼”とは、鷲尾を通じての社会の“眼”だけではなく、また夫須永の“眼”でもある。彼女は、須永の〈眼つきの意味〉を、それは性行為に関してならば自分をさらに進むように励ますものとして読んでいる。しかし、悲劇が起こったその日、常に自己の〈性欲〉の対象として〈道具〉のように扱ってきた須永に独立した別の世界／内面の世界でもあるのではないかと感じた時子は、夜中に起きて、夫の天井を見つめているその眼に潜んでいる意味が読めず、それに圧迫感を感じる。結局、その圧迫感／恐怖感に包まれてしまった彼女は、夫の触感の他に世界との唯一で、最後のコミュニケーション・ツールとしての両眼を潰し、その身体をまったく〈道具〉にしてしまう。実際、須永にそうした〈別の世界〉があったかどうかは、作品の中でそれを確認することができない。ところが、自分を責めているように感じていた鷲尾少将という社会の“眼”を避けようとしていた時子は、須永の場合、最初からそんな危険がないと思い込んでいたにもかかわらず、夫の眼つきを読み取れず、圧迫感を感じると、夫の両眼を潰して、その身体を言葉通りに操り人形にする以外に選択はなかったのである。

両眼をつぶされた須永は、結局、妻に〈ユルス〉というメッセージを残して、邸内にある古井戸に、戦後に残存した戦争の記憶であったその身体を捨ててしまう。須永のこのメッセージは、時子に自分を安心させるために残されたものとして認められ、このように心身に沁み込んでしまったように感じていた罪悪感から脱することもできたといえる。彼を探すために鷲尾少将と古井戸の周辺までいった時子は——四肢と聴覚と声につづいて両眼も失った後の須永を思い出させるように——

〈一匹の芋虫〉が〈下のまっくろな空間へ、底知れず落ちて行く光景を、ふと幻に描いた〉という描写によって作品は幕を閉じる。このように、乱歩のいう「極端な苦痛と快楽と悲劇」の「悲劇」の部分として須永／男性／兵士＝芋虫の死と言う極端な「悲劇」が描かれていると思われる。

以上論じてきたように、本稿では『芋虫』について、兵士のディスアビリティという観点を出発点として、近代国民国家と男性性の関係から考察し、名誉なる戦傷を負って帰還した兵士とその妻が戦争直後に受けた待遇と、その三年後に彼らを襲った悲劇の対照性を通じて、国家が男たちを組み込もうとした男性性——つまり男は勇敢に戦う／守るジェンダーであるという神話——は、彼らの人生を一変させる悲劇となり、もはや彼らは自己の身体の持ち主でさえあり得なくなったことを提示しようとした。国家の戦略によって、国と国民の防衛を維持させるという神聖な理由のもとに引き起こされた戦争＝暴力の場で、不治の障害を負って、男性としてのすべてのシンボルを失った兵士たち＝男性たちは——彼らを社会にとって忘れるべき戦争の記憶とする、また彼らにとって永遠に続くべき戦争の記憶となる——その身体を抱えて、非常な苦痛と悲劇を味わうということ、そこで逆説的に生じてしまう快楽を持ち得ること、さらに、当時の男性をめぐる諸規範に対する強い批判性が明らかになったと思われる。

付記

- * 本論において、テキストは『江戸川乱歩全集 3』（講談社、1969）に拠り、〈 〉で表した。
- * 『芋虫』には、現在において差別的な表現が見られるが、作家の意図を重視し、原文のまま引用した。
- * 本稿での引用は原則的に、全て新字を用い、適宜ルビは省略した。
- * 特に注記の無い限り、外国語文献は筆者が日本語訳を行った。

注

- (1) Joanna Bourke “*Dismembering the Male : Men's Bodies, Britain and the Great War*” (Reaktion Books, London, 1996) から引用した。
- (2) Ernest Gellner “*Nations and Nationalism*”, Oxford : Basic Blackwell, 1983
アーネスト・ゲルナー 『民族とナショナリズム』、加藤節監訳、岩波書店、2000（本稿

では、日本語訳を参照・引用した。)

- (3) 若桑みどり『戦争とジェンダー 戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論』、大月書店、2005
- (4) 阿部恒久、大日方純夫、天野正子編『男性史1— 男たちの近代』、「総論」、日本経済評論社、2006
- (5) George L. Mosse *"The Image of Man : The Creation of Modern Masculinity"*, Oxford University Press, 1996
ジョージ・L・モッセ『男のイメージ— 男性性の創造と近代社会』、細谷実等訳、作品社、2005 (本稿では、日本語訳を参照・引用した。)
- (6) Thomas Kuhne (Hg.) *"Männnerggeschichte, Geschlechtergeschichte : Männlichkeit im Wandel der Moderne"*, New York : Campus, 1996
トーマス・キューネ「性の歴史としての男性史」、『男の歴史—市民社会と「男らしさ」の神話』、星乃治彦訳、柏書房、1997 (本稿では、日本語訳を参照・引用した。)
- (7) 江戸川乱歩「探偵小説四十年 上」『江戸川乱歩全集 13』、講談社、1970
- (8) 江戸川乱歩「悪夢」『新青年』第10巻第1号、博文館、1929
- (9) 江戸川乱歩「芋虫」『江戸川乱歩全集 3』、講談社、1969
- (10) 荒俣宏『プロレタリア文学はものすごい』、平凡社、2000
- (11) 中島河太郎「第6巻解題」『江戸川乱歩推理文庫 6』、講談社、1988
- (12) 荒正人「解説」『江戸川乱歩傑作選』、新潮社、1960
- (13) 加藤秀俊『文芸の社会学』、PHP 研究所、1979
- (14) 浜口稔「夢見る乱歩—— 密室パノラマの快楽」、『ユリイカ 5 (特集：江戸川乱歩— レンズ仕掛けの猟奇耽異)』、青土社、1987
- (15) 百瀬久「江戸川乱歩「芋虫」論—— 「悪夢」の原因」、『文学論藻 (東洋大学文学部紀要第58集、日本文学文化篇)』、2005
- (16) 松山巖『乱歩と東京— 1920 都市の貌』、PARCO 出版社、1984
- (17) Jennifer TRAVIS *"Wounded Hearts : Masculinity, Law, and Literature in American Culture"*, The University of North Carolina Press, USA, 2005
- (18) Susan GRIFFIN *"Wounded Hearts : Masculinity, Law, and Literature in American Culture"* (The University of North Carolina Press, USA, 2005) から引用した。
- (19) Joanna BOURKE *"Dismembering the Male : Men's Bodies, Britain and the Great War"*, Reaktion Books, London, 1996
- (20) 海野福寿『日清・日露戦争 日本の歴史 18』、集英社、1992
- (21) 海野福寿『日清・日露戦争 日本の歴史 18』(集英社、1992) から引用した。
- (22) 『光』、明治社会主義資料集 第2集、明治文献資料刊行会、1960 (復刻版)
- (23) この引用箇所は、『新青年』に発表された当時、伏せ字にされた表現である。

(24) 注 23 参照。

(25) 注 23 参照。

(26) 注 23 参照。

(ニライ・チャルシムシエク／チャナツカレ・オンセキズ・マルト大学)